

注)

- 2) 青森県内では、津軽地方および下北地方では「サルケ」「サラケ」、上北地方では「シクボ」「シゴボ」「シクボ」などと呼ばれる。本稿のタイトルや地の文では、基本的に「サルケ」を用いる。ただし聞き取りの記録については、会話文以外についても話者の発音を尊重した表記とする。
- 3) 「泥炭」について『新版地学事典』(地学団体研究会 新版地学事典編集委員会編, 平凡社, 1996) では「湖沼、河川の後背湿地など排水不良地に生育する草本・樹木類およびコケ類などの遺体が、還元状態で堆積した未分解の有機物質」と定義する。泥炭のなかでとくに草本類を主体とするもの(草本泥炭)を「草炭」という場合がある。
- 4) 拙稿2015「青森県岩木川流域におけるサルケ（泥炭）の利用」（青森県立郷土館2015『青森県立郷土館研究紀要』第39号, pp. 63-102）  
拙稿2016「青森県下北地方におけるサルケ（泥炭）の利用」（青森県立郷土館2016『青森県立郷土館研究紀要』第40号, pp. 89-148）  
拙稿2017「青森県上北地方におけるシギボ（泥炭）の利用」（青森県立郷土館2017『青森県立郷土館研究紀要』第41号, pp. 89-162）
- 5) 西津軽郡(旧木造町、旧車力村、旧森田村、旧稲垣村、鯉ヶ沢町) 北津軽郡(旧中里町、旧金木町、鶴田町) および五所川原市を対象にし、44名からお話をうかがった。
- 6) 木造大畑のY氏およびZ氏(事例②⑥)。別件の民俗調査(公用)に随行した際にサルケについてもお話を伺った。
- 7) 青森県2017『青森県史 資料編 考古 I』, P. 44
- 8) 菊池利夫1958『新田開発』、土淵史編纂委員会編1958『青森県土淵史』などを参照。17世紀なかばころはまだ「桑野木田よりも下もは芦萱茂り菴地にして十三迄は大菴」(『津軽信政公事蹟』であった(工藤睦男編1984『木造町史近世編』下巻, p. 30)。
- 9) 『津軽見聞記』(青森県立図書館1930『宝暦 津軽見聞記』「青森県立図書館叢書」第一篇)p. 17
- 10) 著者不詳『広須組三新田農術覚書』(葛西善一ほか編1993『津軽の農書』みちのく双書第36集) p. 101。本書は安永2(1773)年の編集だが原本はより古い時代に成立したと考えられる(『津軽の農書』佐々木隆次氏による解題)。「新田さる毛地菴地の畔は深く放を善とするもの也浅ければ土湿抜かね宜からず是等は土地にも寄べきか勿論さるけの田地など畔岸浅ければ苗植て拔稲の生立も悪しく稔劣れる事也」と記される。芦沼の惣四郎(-1774)が著したという通称『惣四郎農書』(工藤睦男編1987『木造町史 近世』下巻pp. 254-262所収)に同様の記述があり「新田さる毛地の畔は深く放つを善とする物なり深ければ土湿ぬけかねよろしからず」「扱さる毛地などはからさききて是を用ひ耕水を懸、塊かき中搔きしても深田ハ馬足叶はぬゆへ鉄にても擺も有」と記される。同書はこれが津軽最初の農書であるとしている(同左pp. 254-255)
- 11) 菅江真澄『そとが浜風』(内田武志宮本常一編1971『菅江真澄全集』第一巻)p. 275。天明5(1785)年8月11日の条
- 12) 菅江真澄『雪の出羽路』(内田武志宮本常一編1976『菅江真澄全集』第六巻)p. 251。文政7(1824)～同9年に地誌編集の目的で執筆されたもの。
- 13) 比良野貞彦『奥民図彙』(山田龍雄ほか編1977『日本農書全集』1)p. 148。天明～寛政年間(1781-1801)ころの著作
- 14) 松浦武四郎『東奥沿海日誌』(吉田武三編1969, 時事新書『東奥沿海日誌』)pp. 43, 48, 49。嘉永3(1850)年の著作
- 15) 岸俊武1876『新撰陸奥国誌』第三卷(青森県文化財保護協会発行「みちのく双書第十七集」)p. 35
- 16) 五所川原市編1993『五所川原市史 史料編』1, pp. 459-460および同1998『五所川原市史 通史編』2, pp. 784-785
- 17) 野本寛一2005「平地水田地帯の民俗—津軽の『サルケ』を緒として」(弘前学院大学地域総合文化研究所編2005『地域学』三巻) p. 71
- 18) 東奥日報社1926『東奥日報』大正15年3月22日付記事
- 19) 東奥日報社1928『青森県総覧』p. 957。昭和3年当時、津軽地方の第一は嘉瀬村(年産額1万円超)であったという(同書p. 1023)。
- 20) 内田邦彦1929『津軽口碑集』郷土研究社, p. 34
- 21) 森山泰太郎1976『陸奥の伝説』pp. 98-99 標題「弘法のサルケ」
- 22) 岸俊武1876『新撰陸奥国誌』第三卷(青森県文化財保護協会発行「みちのく双書第十七集」)p. 105
- 23) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編1985『角川日本地名大辞典』2 青森県, 角川書店p. 304
- 24) 東奥日報社1912『東奥日報』明治45年7月9日付記事
- 25) 佐藤公知編1954『西津軽郡史』p. 736
- 26) 松浦武四郎『東奥沿海日誌』(吉田武三編1969, 時事新書『東奥沿海日誌』)p. 48
- 27) 柳田國男1939『居住習俗語彙』(1975復刻『居住習俗語彙』国書刊行会) p. 220「秋田の八郎湖付近の野山の乏しい土地では、地下から黒い土塊の如きものを掘出して燃料にして居た」
- 28) 岸俊武1876『新撰陸奥国誌』第三卷(青森県文化財保護協会発行「みちのく双書第十七集」)p. 105
- 29) 陸奥新報社1946『陸奥新報』昭和21年12月19日付記事「今様番所夜話 千俵の關コメはこうして流れた 木造の代官与力に聞く」
- 30) 工藤睦男編1984『木造町史 近世』上巻pp. 48-54, 工藤睦男編1987『木造町史 近世編』下巻pp. 384-385
- 31) 岸俊武1876『新撰陸奥国誌』第三卷(青森県文化財保護協会発行「みちのく双書第十七集」)p. 125
- 32) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編1985『角川日本地名大辞典』2 青森県, 角川書店p. 887
- 33) 矢橋晨吾1981「低平泥炭地の農地工学的改良に関する研究」, 『弘前大学農学部学術報告第』36号, pp. 40-43
- 34) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編1985『角川日本地名大辞典』2 青森県, 角川書店p. 887
- 35) 昭和45年度から実施された青森県営西津軽地区大規模圃場整備事業を指すと思われる。
- 36) 松浦武四郎『東奥沿海日誌』(吉田武三編1969, 時事新書『東奥沿海日誌』)p. 43「此地にてカシと云りに火を付けて燃しける有」
- 37) 佐々木房生1968「ガスベラ」, 日本常民文化研究所1968『民具マンスリー』1巻5号p. 2

- 38) 宮本常一ほか編1970『日本庶民生活史料集成第十巻農山漁民生活』「奥民図彙 解説」 p. 253
- 39) 松浦武四郎『東奥沿海日誌』(吉田武三編1969, 時事新書『東奥沿海日誌』) p. 43
- 40) 坂口豊1974『泥炭地の地学』東京大学出版会 p. 62-63 41) 同左 p. 91
- 42) 岸俊武1876『新撰陸奥国誌』第三巻(青森県文化財保護協会発行「みちのく双書第十七集」 p. 156 「其焚し灰黯赭色にして獼猴の色に似たるにより猿毛と呼るなり」
- 43) 松浦武四郎『東奥沿海日誌』(吉田武三編1969, 時事新書『東奥沿海日誌』) pp. 48, 49)
- 44) 内田邦彦1929『津軽口碑集』郷土研究社, p. 34
- 45) 拙稿2015「青森県岩木川流域におけるサルケ(泥炭)の利用」(青森県立郷土館2015『青森県立郷土館研究紀要』第39号, pp. 79-80
- 46) 内田邦彦1929『津軽口碑集』郷土研究社, p. 34 47) 東奥日報社1926『東奥日報』大正15年3月22日付記事
- 48) 拙稿2015「青森県岩木川流域におけるサルケ(泥炭)の利用」(青森県立郷土館2015『青森県立郷土館研究紀要』第39号, p. 74
- 49) 東奥日報社1912『東奥日報』明治45年7月9日付記事
- 50) 弘前大学民俗研究部1984『こまおどり』第25号「木造町民俗調査報告書」 p. 11
- 51) 拙稿2015「青森県岩木川流域におけるサルケ(泥炭)の利用」(青森県立郷土館2015『青森県立郷土館研究紀要』第39号, p. 77
- 52) 五所川原市編1993『五所川原市史 史料編』1, p. 460
- 53) 拙稿2015「青森県岩木川流域におけるサルケ(泥炭)の利用」(青森県立郷土館2015『青森県立郷土館研究紀要』第39号, p. 95
- 54) 東奥日報社1932『東奥日報』昭和7年5月17日付記事, 「名産が生まれるまで」(六) 津軽新田を語る『さるけ』 菓子
- 55) 陸奥新報社1946『陸奥新報』昭和21年12月19日付記事 「今様番所夜話 千俵の闇コメはこうして流れた 木造の代官と力に聞く」
- 56) 東奥日報社1912『東奥日報』明治45年7月9日付記事
- 57) 岸俊武1876『新撰陸奥国誌』第三巻(青森県文化財保護協会発行「みちのく双書第十七集」) pp. 186-187 58) 同左 p. 179
- 59) 平尾魯仙『合浦奇談』巻二(弘前市立図書館蔵) 安政2(1855)年の著
- 60) 拙稿2015「青森県岩木川流域におけるサルケ(泥炭)の利用」, 青森県立郷土館2015『青森県立郷土館研究紀要』第39号, p. 74
- 61) 拙稿2016「青森県下北地方におけるサルケ(泥炭)の利用」, 青森県立郷土館2016『青森県立郷土館研究紀要』第40号, p. 94
- 62) 2015年、筆者取材当時
- 63) 五所川原市編1993『五所川原市史 史料編』1, p. 460
- 64) 拙稿2016「青森県上北地方におけるシギボ(泥炭)の利用」, 青森県立郷土館2016『青森県立郷土館研究紀要』第41号, p. 152および拙稿2015p. 141
- 65) 高田雅之の2017「泥炭地の分布の変遷」(矢部和夫ほか2017『湿地の科学と暮らし—北のウェットランド大全』 pp. 245-246)
- 66) 坂口豊1974『泥炭地の地学』東京大学出版会 p. 30, pp. 48-52
- 67) 東奥日報社1908『東奥日報』明治41年5月30日付記事
- 68) 高田雅之の2017「泥炭地の分布の変遷」(矢部和夫ほか2017『湿地の科学と暮らし—北のウェットランド大全』 pp. 247-249)
- 69) 矢橋農吾1981「低平泥炭地の農地工学的改良に関する研究」, 『弘前大学農学部学術報告第』36号, p. 34
- 70) 森山泰太郎1976『陸奥の伝説』 pp. 98-99 標題「弘法のサルケ」
- 71) 内田邦彦1929『津軽口碑集』郷土研究社, 序文
- 72) 東奥日報社1941『月刊東奥』昭和16年1月11日号(3巻1号)
- 73) 鳴海官蔵編1967『清明』 p. 14、弘前市狼森地区での生活改善を指導した鳴海康仲氏らによる調査
- 74) 陸奥新報社1946『陸奥新報』昭和21年12月19日付記事
- 75) 拙稿2015「青森県岩木川流域におけるサルケ(泥炭)の利用」, 青森県立郷土館2015『青森県立郷土館研究紀要』第39号, p. 84
- 76) 坂口豊1974『泥炭地の地学』東京大学出版会 p. 30, p. 49
- 77) 野本寛一2005「平地水田地帯の民俗—津軽の『サルケ』を緒として」(弘前学院大学地域総合文化研究所編2005『地域学』三巻) p. 75
- 78) 拙稿2015「青森県岩木川流域におけるサルケ(泥炭)の利用」, 青森県立郷土館2015『青森県立郷土館研究紀要』第39号, p. 80
- 79) 青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ2008『岩木川流域の民俗』(青森県史叢書)p. 83 80) 同左 p. 81
- 81) 拙稿2016「青森県上北地方におけるシギボ(泥炭)の利用」(青森県立郷土館2016『青森県立郷土館研究紀要』第41号, p. 103
- 82) 弘前大学民俗研究部1984『こまおどり』第25号「木造町民俗調査報告書」 p. 11
- 83) 拙稿2015「青森県岩木川流域におけるサルケ(泥炭)の利用」, 青森県立郷土館2015『青森県立郷土館研究紀要』第39号, p. 90 「(7)用途」参照。
- 84) 岸俊武1876『新撰陸奥国誌』第三巻(青森県文化財保護協会発行「みちのく双書第十七集」 p. 156 「此村々山遠く薪炭に乏ければ菅茅芦荻の類を以て薪に替ひ又泥炭を采て炊爨の用となす」
- 85) 拙稿2015「青森県岩木川流域におけるサルケ(泥炭)の利用」, 青森県立郷土館2015『青森県立郷土館研究紀要』第39号, p. 82-85に、北津軽郡鶴田町や西津軽郡鯉ヶ沢町での事例を掲載。
- 86) 拙稿2015「青森県岩木川流域におけるサルケ(泥炭)の利用」, 青森県立郷土館2015『青森県立郷土館研究紀要』第39号, p. 94。ちなみに隣県秋田では、ガス(泥炭)を「今でも焚いている人もたまにはいる」(佐々木房生1968「ガスベラ」, 日本常民文化研究所1968『民具マンスリー』1巻5号p. 2)との記述がある。昭和43年の記録である。